〈資　料〉

# 1653年スイス農民戦争における農民盟約者団同盟文書*

岩　井　隆　夫

## はじめに

1653年の1月から6月にかけて展開したスイス農民戦争は一三邦同盟時代の近世スイスにおける最大の農民反乱であるとともに，農民軍の敗北により各邦において寡頭制支配が強化され，1798年のヘルヴェティア共和国の成立に至るまでのアンシャン・レジーム体制が確立される契機ともなった民衆反乱である[1]。

この農民反乱は前年1652年12月のルツェルン邦エントレブーフでの集会に始まり，53年2月以降ベルン邦，ルツェルン邦，ゾーロトゥルン邦およびバーゼル邦の各地でランツゲマインデ（住民集会）[2]が開催された。4月23日[3]にベルン邦ズミスヴァルト，および4月30日に同邦フットヴィールで開催されたランツゲマインデ（農民集会）[4]には千人から三千人規模で各地の反乱農民が参加し，農民反乱は邦の域を超えた。この二つのランツゲマインデ（農民集会）の席上で各地の農民代表により宣誓された内容が5月14日にフットヴィールで開催されたランツゲマインデ（農民集会）の場で承認された[5]。これが農民盟約者団同盟文書（通称「フットヴィール同盟文書」）[6]である。

この文書は同文のものが4通作成され，ベルン，ルツェルン，ゾーロトゥルンおよびバーゼルの各邦に送達されるが，ベルン邦，ルツェルン邦およ

びバーゼル邦に送達された文書は農民戦争終結後に各都市当局により破棄され，ゾーロトゥルン邦に送達された文書が唯一の原本としてゾーロトゥルン州立文書館に所蔵されている[7]。

この文書の公刊史料[8]はいずれも写本を底本としているので，ここに訳文と共に全文を掲載する次第である。

農民盟約者団同盟および同盟文書の成立の経緯については別の機会に明らかにすることにして[9]，ここでは同盟文書の内容に関して特筆すべき二点を指摘しておきたい。

一つは宗教に対する不干渉の考え方が盛り込まれている点である（第一条項）。もう一つはスイス盟約者団の成立以来の各種の同盟文書に見られる相互援助規定が盛り込まれている点である（第二条項から第五条項まで）。

＊本資料の閲覧などについては，ゾーロトゥルン州立文書館(Staatsarchiv des Kantons Solothurn)の館長をはじめとして館員の方々に多大なる便宜を図って頂いた。ここに記して御礼を申し上げる。

## 注

1）森田安一編『スイス・ベネルクス史』山川出版社，1998年，86頁。なおスイス農民戦争に関する最新の研究としては次のものがある。A. Suter, *Schweizerische Bauernkrieg von 1653,* Tübingen 1997.

2）各邦の個別地域のランツゲマインデは実態に即して住民集会と規定することにする。

3）文書に記載されている日付はユリウス暦（旧暦）とグレゴリウス暦（新暦）の両者を用いており，グレゴリウス暦による日付はユリウス暦による日付の十日後となる。なお本稿における記述においてはグレゴリウス暦の日付を採用する。

4）各邦の複数の個別地域もしくは複数邦の農民によるランツゲマインデは実態に即して農民集会と規定することにする。なお，一三邦時代の農村邦における政治制度としてのランツゲマインデは「邦民集会」，スイス連邦共和国成立以降における政治制度としてのランツゲマインデは「州民集会」と規定することを提起したい。

5）*Handbuch der Schweizer Geschichte*, Bd. 1, 2. Aufl., Zürich 1980, S.655.

6）Staatsarchiv des Kantons Solothrun, *Huttwiler Bundesbrief*.

7）S.Widmer, *Illustrierte Geschichte der Schweiz*, 2. Bd., Zürich 1960, S.219. なお同書掲載の写真は同盟文書の原本の裏面である。

8）この文書の公刊史料とされるものは二つある。一つは *Amtliche Sammlung der ältern Eidgenössischen Abschiede*, Bd. 6, Abt. 1, Frauenfeld 1867, SS.163-166 である。この史料の底本はルツェルン州立文書館所蔵の写本とされている（Ibd., S. 163）が，同文書館における該当の写本の所蔵を確認することはできない。もう一つは *Die Rechtsquellen des Kantons Bern*, 1. Teil, 4. Bd., 2. Hälfte, *Das Stadtrecht von Bern* IV, Aarau 1956, SS.1125-1129 である。この史料が底本としているのは同年5月19日に作成された写本であり，この写本はベルン州立文書館に所蔵されている。Staatsarchiv des Kantons Bern, A IV 183, *Allgemeine Eydgenößische Bücher, Bauernkrieg de 1653*, D, SS.245-260.

9）この問題を明らかにするためには，4月23日にズミスヴァルトで，4月30日および5月14日にフットヴィールでそれぞれ開催されたランツゲマインデ（農民集会）をめぐる農民側の人的ネットワークの動きが農民盟約者団同盟の成立および同盟文書の作成とどのように関連していたのかを時系列的に辿る必要がある。

## 【訳文】

### 「フットヴィール同盟文書」

1653年にルツェルン領のエントレブーフにおいて，都市ルツェルンのお上との間で争いと対立が生じたことは周知のことである。その原因は都市ルツェルンのお上が領民の文書と印章にさからって新税，重罰および負担を多大に課すことを強制したからである。そのため領民はお上の元に使者を派遣した。使者たちは恭しくへりくだり礼を尽くして，このような負担を免除してくれるように懇願した。しかしながら使者たちは何も得られなかったばかりでなく，さらに拘束されたり脅されかかったりもした。そのために怒った農民は，お上が領民から剝奪した古い文書と諸権利を領民の手に戻すまでは貢租や貨幣負債を今後一切差し出さないことを，全財産を捧げて共同で誓約した。それゆえお上は他の臣民を促して服従させようとした。ところが原因を聞き知った領民は同一の負担を自らも負わされていることに気が付いた。したがって他の地の領民もエントレブーフの領民の

味方となり，ヴォルフーゼンにおいて共同で誓約した。なぜなら懇願したにもかかわらず領民に属する特別なことは何ら得られなかったからである。この件についてお上はひどく不満であった。主君との争いから長きにわたり無縁であったカトリック六邦からの使節にお上は書き送った。その間に領民たちは救援を求めた。したがって長引けば長引くほど事態は悪化した。続いて都市ルツェルンに隣接する郡代官区が進軍した。というのも，二度と再び都市に誓約しようとしないのであればすべてを破壊するとこれら郡代官区の同盟仲間であるクリエンスとホルヴに対して主君が強く脅かしたからである。バーデンの盟約者団一三邦と従属邦の使節が不当で不正な公告[1]を作成し布告させたために，使節はすべての地の臣民から憎まれ援助されることがなくなり，したがってすべての地においてもはや隣人となるようなことがあってはならなくなった。その公告の内容は，公然と争いに及んだのであるから厳罰の過ちや恣意性については領民に多大の責任があり，このことは上記のエントレブーフの事件を起こした者たちの大部分やその者たちを援助した者すべてについて妥当するというものであった。使節はあまりにもけなされ誹謗されてしまったために，もはや自らの身体と生命が安全ではなくなり，危険に曝されたり暴力を受けたりもした。その間に多くの地で邦内および邦外の兵士が彼らを襲ったので，彼ら領民はわれらベルン邦の農民と話をするためにやって来て，われらはお互いに苦悩と損害を与える意志はないこと，邦内の兵士にも邦外の兵士にもあちこち荒らし回らせず，われらを襲わせないこと，そうすればわれらは忠実な，愛すべき隣人として相互に交易し，われらの家宅，全財産，妻子を良き平和な状態に維持し続けられることを取り決めた。

われらベルン領の領民は主君やお上に向けてわれらの苦情を和らげ，手を引いてもらうように幾度も懇願しようとしてきた。数年前のトゥーン戦争もしくはトゥーン紛争[2]においてそのようなことも取り決められたのであるが，うまくいかないで終わってしまった。そのためにわれらは何度もベルンのお上に使者を遣わして，われらの苦情を取り除いてもらうように

恭しく懇願した。だがそれについてお上はわれらの使者に対して，懇願を受け入れるためにはわれらすべての名において跪くことを強要した。その後われらの使者に約束したと同じ事をまだ行っていない。そのためわれらは常に見誤っていたとしか思えなくなった。

1653年4月13/23日にズミスヴァルトでランツゲマインデが開催されたのはわれらの苦情の数々や不当な公告を訴えるためである。われらにとって少なからず重要であった誉れと良き名を不当な公告が傷つけようとしたのである。われらがベルン領，ルツェルン領，ゾーロトゥルン領およびバーゼル領をはじめとして後段で列挙される地から集まったのは苦情を訴えるという特別な理由があってのことである。われらは親密に話し合った上で野外にて満場一致で，堅固で不変にして揺るがぬ永久の盟約と同盟を真に永遠なる神に対して一同挙手して誠実に誓約した。

父にして子にして聖霊である聖なる三位一体としての神の名においてアーメン。われら一同が誓約したのは以下のことである。

第一に，はるか昔の盟約者団が数百年前に共同で誓約した最初の盟約者団同盟[3]を保持し，相互援助により不正を排除し正義を守る。したがって主君とお上に属することは彼らにとどまり与えられ，農民と臣民に属することはわれらにとどまり与えられることを望む。そのためにわれらは生命，全財産および血を捧げて相互に保護する。こうしたことは当事者すべての宗教に対して害を及ぼしたり異議を申し立てることではない。

第二に，われらは相互に援助して新たなる不正な公告をことごとく排除する意志があるけれども，いずれの地の臣民も自らのお上に対して正義を主張すべきである。だが彼らがお上と衝突しようとする場合には，事前にどちらが正しいのか正しくないのかを判断できるように，他の同盟仲間がそれとは知らずに事を起こしてはならない。われらの同盟仲間が正しい場合にはわれらは衝突にあたって彼らを援助するが，正しくない場合には断るつもりである。

第三に，お上が領外や領内の民衆にとって厄介な存在であろうとした場

合には，われらはこれを排除するためになんら辛抱することなく，必要ならば慰めたり雄々しく駆けつけたりして他の同盟仲間を援助するつもりである。

第四に，この反乱を通じての幾重もの行為のためにある者が都市や農村において主君や他の者たちにより拘引されたり，身体や財産もしくは生命に危害が及ばされた場合にも，どの同盟仲間にも関わることとしてわれら同盟仲間の地はすべて身体，全財産および血を捧げてその者を解放し救出して援助しなければならない。

第五に，この宣誓された盟約と同盟は十年ごとに同盟仲間により再び読み上げられ更新されねばならない。そしていずれかの地がお上や他の者について不満を抱いたときにも，われらの子孫が二度と再び更新と不当な不満で煩わされることがないように，同じように常に援助されるのは当然である。

第六に，われらのうちいかなる者も高慢であったり厚顔であってはならず，この同盟盟約に反して語ったり助言や助力を与えてはならず，同盟から離脱したり同盟を打ち砕いたりしてはならない。こうしたことが蔑ろにされるならば，その者は偽りの誓約をする不誠実な者とみなされてその罪に応じて処罰されねばならない。

第七に，すべての地で他の同盟者が決議した上で当事者のすべてが同時に相互に決議と和議を行うまでは，いかなる同盟者もお上との間でこの反乱について完全に和議を結んだり決議してはならない。

続いてこの同盟誓約文書に含まれたり宣誓した地や地方代官区を挙げる。一番最初にヴォールフーゼンで一緒に誓約した他の9つの郡代官区を含むラント・エントレブーフ。続いてベルン邦から。はじめに郡代官区トラクセルヴァルト，ブランディス，ズミスヴァルト，フットヴィール，全エメンタール，ジーグナウ，そしてラントシャフト自由裁判区，シュテフィスブルク，ヒルターフィンゲン，ジーゲリスヴィルのハンス・ビューラー，彼自身と彼の子孫たち。郡代官区インターラーケン，ブリエンツ，フルティ

ンゲン，地方裁判区シュテルネンベルク，ツォリコーフェン，コノールフィンゲン，ゼフティンゲン，伯領ニーダウ，伯領ビューレン，郡代官区フラウエンブルンネン，郡代官区ヴァンゲン，郡代官区ランズフート，都市を除く伯領ブルクドルフ，郡代官区ヴァンゲン，郡代官区アールヴァンゲン，郡代官区ビップ，都市および郡代官区アールヴルクおよび伯領レンツブルク，郡代官区シェンケンベルク。

ゾーロトゥルン領から，伯領ゲスゲン，都市およびアムトオルテン，郡代官区ベヒベルク，郡代官区ファルケンシュタイン，郡代官区クリーグシュテッテン，郡代官区フルメタール，郡代官区レーベルン，郡代官区ブヒベルク，郡代官区ドルナッハ，郡代官区ディアシュタイン，郡代官区ギルギベルク。

バーゼル領から村落を含めた都市リースタール，伯領ファーレンスブルク，郡代官区ヴァーレンブルク，郡代官区ホンブルク，郡代官区ラームシュタイン，盟約者団の共同支配地フライエ・エムター。

この同盟宣誓と盟約はフットヴィールにて右に挙げた邦からの代表使節により上記の年の5月4/14日に承認され，ここに掛けられた印章によって永遠に記憶されることにより効力をもった。この文書は同文のものが四通作成され，ベルン，ルツェルン，ゾーロトゥルンおよびバーゼルの各邦に一通ずつ送達された。

(別記左)

都市ベルン，ルツェルン，ゾーロトゥルンおよびバーゼルに対する臣民の側からの従属の通告。項目「邦」，文書番号「219」，袋「B」に保管。

(別記中央)

1653年5月4/14日にゾーロトゥルン領へ送達。

(別記右)

1653年にルツェルン領のエントレブーフでの紛争を契機としてベルン領，ルツェルン領，ゾーロトゥルン領およびバーゼル領の農民がお上に対して訴えた苦情と不満に関する同盟協定文書。この文書はズーミスヴァルトで

締結されフットヴイールで誓約された同盟の文書であり，都市オルテンの印章を含む6個の印章を掛けて，ゾーロトゥルン領に一部が送達された。

(印章)

エントレブーフの印章

ヴィリザウの印章

都市オルテンの印章

ローテンベルクの印章

都市リースタールの印章

ベルン邦農民の印章

**注**

1）5月4日に布告された盟約者団会議の仲裁裁定を指す。*Amtliche Sammlung der ältern Eidgenössischen Abschiede*, Bd. 6, Abt. 1 SS.168-171.

2）1641年にベルン邦において新税導入を契機に生じた紛争を指す。この紛争について詳細に扱った文献としては次のものがある。N.Landolt, "Die Steuerunruhen von 1641 im Staate Bern, Eine Studie zum bäuerlichen Widerstand in der frühen Neu- zeit", in: *Berner Zeitschrift für Geschichte und Heimatkunde*, Jg. 52 (1990), SS.129-178.

3）1291年に原初三邦（ウーリ，シュヴィーツおよびニートヴァルデン）により締結された永久同盟を指す。

## 【原文】

Huttwiler Bundesbrief

(Staatsarchiv des Kantons Solothurn)

[Vorderseite]

In Wüssen und Künd ist menniklichen was sich Anno 1653 in der Herrschafft Lucärn im Entlibůoch für ein Gspan und Streitikeit entstanden wider Ihr. G[nädige]. Oberkeit der Statt Lucärn selbsten der Ursach das sie ihnen vil neüwe Ufsätz große Stroffen und

Beschwerunßen hand ufgeladen und bezwüngen wider Ihr Brief und Sigel, darum sy Gsante Menner an Ihr. G[nädige]. Oberkeit geschickht, welche früntlich underthänig und Ingebür mit grosser Pitt anngehalten haben, solche Bschwerden sye zůo entlassen und abzuthuon, aber nit alein nichtß erlangen mögen, sonder noch usgebalget und abthreüwen wellen, derowegen die Bauren erzürnt worden und hand zůsammen gschworen Ihr Leyb und Läben daran zů setzen, und alß bald ihnen kein Zinß older Gelt schulden mehr wellen zůo kommen lassen biß Ihr G [nädige]. Oberkheit Ihnen ihr alte Brieffen und Rechtungen wider zuo handen stellen, die sye ih[ne]n genommen hand, dorum Ihr Oberkheit Ihre überige Underthonen ufmahnen wellen, sy damit zů bezwingen zů gehorsammen, alß sy aber die Ursach vernommen, hant si sich in glichen Bschwerden auch beladen funden, dorum si auch zů denen in Entlibuoch gestanden, und zů Wolhaussen zůsammen handt geschworen, weilen sy mit Pitt nichts bsonderß erlangen möchten waß ihnen gehörte, derowegen Ihr Oberkheit übel zuo friden, dorum bschribent sy gsante Herren uß den 6 Cathol: Orthen, welche Herrn gar lang mit dem Handel umb sint gangen und hin zwüschet schribent sy umb Hilf und wurd also der Handel je lenger je böser, also dz die Empter für die Statt Lucärn zogent, weyhlen die Herren: Ihren Verpunten Pontßgnossen Krientz und Horw starck und hoch gethreüwt haben, alleß zůverderben, wan sy nit wider zů der Statt schweren wellen, und in dem handt die 13 und etliche zůgewante Orth der Eydtgnoschafft abgesante Herren zů Baden ein unguoteß unwahrhaffteß Mandat gemacht (deß Inhaltß) daß sie aller handt hochsträffliche Fähler und Muothwillen unverantwortenlich wie offenbar verüebt) gethon sollent haben, solches über die obgnambte Anfänger im Entlibůch mehrtheilß, und über alle die Ihnen verhulffen sein wurdent geschehen und ußgehn lassen, domit sy von

allen Underthonen verhafft wurden, und nit zů ihnen fiehlent, also dz sy zů den Nachbarn zů allen Orthen, nit wol mehr dörfftent kommen, wegen deß Mandats weilen sy so hoch verkleinert und verlümbdet worden, daß sy ihr Lyb und Läbenß nit wol mehr sicher waren sonder schon gefarlich und thätlich begägnet, auch darzwüschent hend von vilen Orthen frombd und heimsche Kriegslüth sollen uf sye einfallen, und dorum sy mit unß Bärn Buren zuo reden kommen, und abgeret hand dz mir ein anderen kein Leid und Schaden wellen zů füegen, sonder auch kein fremmbd older heimbsch Volckh wellent durch ziechen lassen sy oder unß zů schedigen, domit wir alß gethreüwe liebe Nachbaren mit ein anderen handlen und wandlen könen, auch unsere Hüser, Höff, Haab und Guott Wyb und Kinder in guotem fridlichen Ruowstandt erhalten, und bliben könten. Und weilen mir im Bärn Gebiet offt in Willenß gewesen unsere G[nädige]. H[erren]. und Oberkheit zůpitten daß sy unsere Bschwerden auch nachlassen sollen und abthůn, wie dan vor Jahren im Dunner Krieg oder Gspan, auch derglichen vereinbarett hett sin sollen, aber schlechtlich gehalten worden, darumb habent mir aber mahlen Gsandte Menner für unsere G[nädige]. Oberkeit gehn Bärn geschickht, und sy underthanig und hochgebätten, sy sollent unsere Bschwerden ab unß nemmen, dorüber aber hant sy unsere Gsandte bezwungen, daß sy in unser aller Nammen handt miessen uf die Knie niderfallen umbgnad bitten und annemmen, und hernoch dasselbig doch noch nit ghalten haben, was sy schon unsern Gsandten versprochen, Darum wir Ursach gegenommen unß in allewag zuversechen. Ist dorum den 13/23 tag abriliß im obigen 1653 Jarß zů Suommißwald ein Lantßgmeindt gehalten worden wegen unser Klag Artikhelß Puncten und deß unguoten Mandats, welcheß unser ehr und guotter Namm auch anthreffen wolte, doran unß nit wenig gelegen.

Dorum wir uß der Herrschafft Bärn, Lucärn, Solothurn, und Bassel Gebiet, und uß den hienachgenambten Orthen sindt zůsammen kommen, wegen ihren Beschwerden, oder uß sonderbaren Ursachen halben, aldo mir unß früntlich ersprachet haben und dorüber uf freyem Fäld ein heilig ein ufgehebten ewigen, stif, stäthen, und festen Eydt und Pondt zů dem wahren ewigen Gott zusammen handt geschworen thrüwlich zů halten wie volget:

In Nammen der hoch heiligen Dryfaltikeit Gott Vatter Sohn und Geist Amen.

So hendt mir zůsammen geschworen in disem ersten Artikel, das mir den ersten Eydtgnösischen Pont so die uralten Eydtgnossen vor ettlich hundert Jahren zůsammen hand geschworen, wellent haben und erhalten, und die Ungrechtigkeit helfen einanderen abthůn, und die grechtikeit ufnen, und also waß den Herren und Oberkheiten gehört sol ihnen bliben und gäben werden, und waß den Buren und Underthonen gehörte, sol auch unß bliben und gäben werden, hieby wellent mir ein anderen schützen und schirmmen mit Lyb, Haab, Gůtt, und Blůott, diß zu aller Seytß den Religionen unschedlich und unbegrifflich. Zum 2. Wellent mir helfen ein anderen alle unguotte neüwe Uffsätz hindannen thuon und sol aber jedeß Orth Underthonen ihr Grechtikheiten von Ihr Oberkheiten selbß vorderen, wan sy aber ein Streit gegen ihr Oberkeit möchtent bekommen, sollent sy doch nit uf ziechen ohne Wüssen und Willen der andern Pontßgnossen daß man vor köne sehen wedere Parth Recht oder Unrecht habe, hendt unser Ponthsgnossen dan Recht, so wellent mir Ihnen darzů helfen hend sy aber Unrecht so wellent mir sye abweysen. Zum 3. Wan die Oberkheiten woltent frembd older heimsche Völckher unß Underthonen uf den Halß richten

[Rückseite]

richten oder leggen so wellen mir die selben ein anderen helfen zů ruckhweysen, und daß selbig gar nit gedulden, sonder so es von Nöthen wäre wollent mir ein anderen trostlichen und manlich byspringen. Zum 4. Wan auch ein old ander Person in Stett oder Landen durch disen ufgeloffnen Handelß willen von einer Herrschafft oder anderen Lüthen yhnzogen oder an Lyb und Guott oder Leben geschedigett wurden sollen aller Örther unser Pontsgnossen den selben helfen mit Lyb, Haab, Guott, und Bluoth erledigen und erlösen, alß wanß ein yeder selber anthreffen wurde. Zum 5. So solle diser unser geschworne Eydt und Pont, alle 10 Jaren umb vorgelesen und ernüweret werden von den Pontßgnossen, und so dan ein old ander Orth ein Bschwerdt hete, von Ihr Oberkheit oder anderß, so will man allezeit, den selben zum Rëchten verhulfen sein, domit also unsern Nochkümligen kein Neüwerung und ungebürliche Bschwerden mehr uf geladen köne werden. Zum 6. Eß sol keiner under unß so vermessen und frech sein, der wider disen Pontschwur reden solle oder Rath und Tath geben wolte wider davon zestohn und znüthen zemachen, welcher aber diß übersehen wurde, solle ein solcher für ein meineyden und thrüwlosen Man gehalten und noch sinem verdienen abgestrofft werden. Zum 7. Es sol auch keines Orthß Pontsgnossen mit ihrer Oberkeit diser Handel völlig verglichen und beschliessen bis die anderen unser Pontsgnossen auch an allen Orthen den Bschluß könen machen, also dazů allen theilen und glich mit ein anderen der Bschluss und Friden solle gemacht werden. Volget alhie die Orth, und Vogteyen so in disem Pontschwur Brief begriffen und geschworen handt aller erstlichen dz Lant Entlibůch sambt den übrigen neün Ämptern, welche zů Wolhusen zůsamen hant geschworen, volget die vogteyen us der Herrschafft Bärn, erstlich Trachselwaldt: Brandis: Sůmiswalt: Huttwyl: und daß gantze Landt Ämmenthal, und Freigricht

Stephüsburg Hilterfingen, und Hanß Büler zuo Sigeriswyl für ihn und sine Nachkommen: Signauw Ambt und Landschafft, Hinderlachen und Brientz, Frutigen, das Lantgricht Sternenberg, Zolikoffen, Konelfingen, dz Landtgricht Sefftingen, Graffschafft Nidauw, Graf Büren, Vogti Frauwbrunnen, Vogti Arberg, Vogtey Lantzhuott, Grofschafft Burtholf usgnommen die Statt, Vogtey Wangen, Vogti Arwangen, Vogtey Bib, Stat und Ambt und Vogtey Arburg, Statt und Grafschafft Lentzburg, Vogtey Schenkhenburg,

Us der Herrschafft Solothurn die Graffschafft Gösgen, Statt und Ambt Olten, Vogtey Bechburg, Vogtey Falkenstein, Vogtey Kriegstetten, Vogtey Flumäthal, Vogtey Läbern, Vogtey Bůochiberg, Vogtey Dornach, Vogty Dierstein, Vogtey Gylgiberg. Uß der Herschafft Basel die Stadt Liestahl sambt irn Dörfern, die Grofschafft Fahrenspurg, Vogtey Wahlenburg, Vogtey Homburg, Vogtey Rahmstein, die freyen Ämbter, so under die Herren Eydtgnossen der alten Orthen gehörte.

Diser Pontschwur und Eydt ist zů Huttweyl von den usgeschossnen Gsanten von den obgenambten Orthen har confirmiert und bestettiget worden im obgetseztem Jahr uf den 4/14 Tag May und mit den hierangehenckhten Insiglen zuo ewiger Gedechtnuß gehenckht und bekrefftiget worden. Diser Briefen sint 4 von Worth zu Worth glich luthent, und ieden Orth einen zůgestelt worden, namlichen Bärn, Lucärn, Solothurn, und Basel.

[anderer Schreiber]

Aufgekundeter Gehorsam den Städten Bern, Luzern, Solothurn u. Basel von Seiten der Unterthanen

P.

Rubrik Kantonal

Loge 219
Sack B.

[in der Mitte]
Herschafft Solothorn gebiet
Zugestelt den 4/14 Maii
1653

[noch ein anderer Schreiber]
Bundvertrag der Landtleüte auß den Herrschaften Bern, Luzern, Solothurn und Baselbieth in Betref ihrer Beschwerden und Klägden gegen ihre Oberkeit bei Anlaß der Streitigkeiten zu Luzern im En[t]libuch 1653 errichtet, und ist dißer Brief den solothurnischen Herrschaften als ihr Exemplar zugestelt worden des zu Summiswald geschloßnen und zu Hutwil beschwornen Bundes mit 6 Sigeln versehen, d[a]runter der Stadt Olten Sigel steht.

[Angehenkte Siegel (von links bis rechts)]
SIGILLVM EN... VCH
[an grünen und roten Seidenbändern] [das Landsiegel Entlebuch]
S COMIT... ...OPIDI WILLISOW
[an gelben und roten Seidenbändern] [das Siegel des Amts Willisau]
+SIGILLVM+CASTRI+OLTEM
[an einem Pergamentstreifen] [das Stadt Sigel Olten]
...ER ANNO 1644
[an einem Pergamentstreifen] [das Siegel von Rothenberg, das aus einem Privatsiegel erstellt wurde]
S CIVIVM+CIVITATIS+DE LIESTAL

[an grünen und roten Seidenbändern] [das Liestaler Stadtsiegel von 1569]

...

[Bern]